

学生取材班が行く

はやりのネタや時事問題、ちょっと気になる先生など、あなたの「知りたい」を学生取材班が調べてレポートします。



教養教育の新カリキュラムが開始

平成23年度から、教養教育が新しくなりました。平和科目の必修化をはじめ、TOEIC600点相当の英語力を身に付けるためのウェブを利用した自分一人で勉強できる英語科目の開設、アラビア語の開設などです。情報科目も近年の情報に関する事件や倫理上の問題などに対応し、最新の内容に改訂しました。また、パッケージ



別科目は、区分が9つから5つに再編され、内容も精選されました。

専門教育に比べて、教養教育は学習する意義が分かりにくく、意欲的に取り組めないという意見も多いと思います。そこで、広島大学教養教育本部副本部長の於保幸正教授(総合科学研究科)にお話を伺いました。



お話を伺った於保先生

「いろんな人とコミュニケーションを取って、自分の意見をきちんとと言える学生を育てることが教養教育の狙いです。専門教育の初歩だけでなく、学問について幅広く学ぶことで、物事を多角的に捉え、批判的思考で自ら考え、判断する態度が養われます。この理解を促すために、入学後の教養教育ガイダンスには力を入れていま

す。学生の意見を取り入れたパワーポイント資料も作っています」
自分が学生の時も、教養の授業には意欲的に取り組めなかったと苦笑いをする於保先生は、授業を行う立場となった今、学生がもっと授業に参加できるよう工夫を凝らしています。学生の近くに行って話したり、質問を紙に書いてもらったりと、学生が参加しやす



い授業を心掛けているそうです。

「新しい物事や考え方を吸収し、自分で考えることは、社会に出ても必要なことです。新カリキュラムでは履修

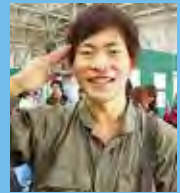
単位など多くの点が変わっていますので、新入生の皆さんは、先輩たちの話をうのみにせず、批判的思考で自ら考え、判断してください」

自分で考える力を身に付けるためにも、授業には意欲的に参加すべきだと思いました。

取材・記事 / 総合科学部2年 藤原 美貴

東日本大震災復興支援 ボランティア報告

こんにちは、HU-style学生スタッフの武林賢朋です。4月26日から30日まで、宮城県七ヶ浜町で震災復興支援のボランティアに参加しました。11歳まで宮城県で過ごした僕にとって、故郷が被災地としてテレビ報道されるのは、他人事ではありませんでした。「故郷は、今どうなっているのか?」大学生協主催のボランティアに参加し



笑顔を忘れずに、故郷でベストをつくす!



実際の光景はテレビの映像以上

て、現地で感じたことをレポートします。

初日、バスから見る風景は、想像を超えるものでした。比較的被害の少ない仙台市内から、瓦礫で埋まる沿岸部の七ヶ浜まで、車で1時間弱。その差に愕然としました。

主な活動は、家屋の泥出しや、支援物資の仕分け・配給、ニーズの聞き込みなどです。住宅を一軒一軒訪ねての調査で、ぼつりぼつりと本音話を話して下さる被災者の方たち。中には「うちは大丈夫だ。何も困ってなくて申し訳ない」と言ってく下さる方もいました。そんな時は「何も無いのが一番です。良かったです」と答え、被災者の方が萎縮しないように気を付けました。一日が終わると、メンバー全員でミーティングを行い、翌日以降の改善につなげていきます。

大学生協ボランティアは、メンバーを入れ替えながら継続して行っています。5日間のボランティアで分かったのは「一人にできることは限られるので、それをつないでいくことが大事」ということ。支援が振り出しに戻ることはないように、自分たちの知り得たことをできる限り後任のボランティアに伝え、宮城を後にしました。



全国からボランティアの集まる拠点ボランティアセンターにて

人々の心の復興には一人一人のペースがあり、それは長い時間を要するものです。西日本に暮らしている僕たちは、「がんばろう」と単にせかすのではなく、長い目で見守り続け、必要とされる時に必要な支援していきたいと思います。

取材・記事 / 法学部3年 武林 賢朋